

限られた派遣期間における小学校のスクールカウンセリングについての一考察

—ある母親面接を通じて—

川島 江美子

A Study of Elementary School Time-Limited Counseling : Through Psychotherapy for a Student's Mother

Emiko KAWASHIMA

摘要

本研究は、限られた派遣期間における小学校のスクールカウンセリングのあり方について、母親面接の事例を取り上げ、時間制限カウンセリングやブリーフセラピーの視点から考察をした。その結果、母親面接で留意する点として、①SCの派遣期間と1回のカウンセリング時間を明確にしておくこと、②関係性の構築と、構築した上で技法をどのように使っていくか、③クライアントの成長力を信頼すること、の3点が考えられた。また、学校組織の一員としてSCが留意する点としては、本事例のような母親自身の相談の場合、担任や学校との連携をいかにしていくかを考える必要があった。

キーワード : スクールカウンセリング, 限られた面接回数, 母親面接, 時間制限カウンセリング, ブリーフセラピー

Keywords : school counseling, limited times of psychotherapy, mother's psychotherapy, time-limited counseling, brief therapy

I. はじめに

平成7年度から、文部科学省の調査活用研究事業としてスクールカウンセラー(以下、SCと記す)が、小学校・中学校・高等学校へ配置された。そして、文部科学省は平成13年度から全中学校配置を打ち出し、平成17年度に、全国すべての公立中学校でSCによる相談活動が可能となった。平成16年度以降は、各都道府県が主体となってSCの活用が検討され、小学校や高等学校、さらには幼稚園での相談活動も充実してきている。ただ、各都道府県は、限られた予算の中でどの校種へ何時間派遣するかについて学校の実情に合わせて決定しているが、できるだけ多くの学校へSCを配置して教育相談活動の充実を図りたいという意向を持っている。したがって、各教育委員会では、SCの派遣校や勤務時間を柔軟に変更できるような配置を模索しながら、スクールカウンセリング事業をおこなっている現状がある。

筆者が所属している富山県においても、平成20年度から小学校への配置拡大を目的として“教育事務所管理カウンセラー”という名称のSCが新たに加わった。これは、学期ごとに派遣校が見直され、また1校当りの勤務時間を週あたり2時間から6時間とするなど、問題を抱えた学校へ臨機応変に派遣できるようにしたSCである。こうした派遣期間や勤務回数が限られたスクールカ

ウンセリング活動が、今後ますます求められると思われる。

派遣期間や勤務回数が限定されたスクールカウンセリング活動のあり方について、これまで論じられてきていない。ただ、時間制限カウンセリングやブリーフセラピーを学校に適応させた知見はこれまで多くみられており、これらを参考にすることは有効ではないかと考えられる。例えば、時間制限カウンセリングでは、初回面接でカウンセリングの回数や1回のカウンセリングの時間を、カウンセラーとクライアントが決めて行っているが(上地, 2001)、派遣期間が限られている場合も回数が限定されることや、1回当りのカウンセリング時間を設定していくことも必要となってくると予想される。また、ブリーフセラピーの“より短期間に、効率的、効果的な援助”という考え方や技法を使っていくことで、早期の支援につながっていくと思われる。

別の角度から、限られた派遣期間や回数におけるスクールカウンセリング活動について考えた時、小学校という校種の特徴も考慮すべきである。小学校は、義務教育のはじまりであり、子どもにとっても親にとっても期待とともに不安も大きく生じる時期である。特に発達の問題については個人差が大きく、集団の中での比較によって“問題”とみなされ、不安を大きくする保護者も少なくない(阪, 1999)。また保護者の子育てへの関心が高い

貴重な時期でもあるため（岡本，2008），保護者がカウンセリングに自主的に来談するという傾向があるのも特徴である（伊藤，2008）。つまり，保護者自身が他の子どもとの比較において我が子に何らかの問題を感じ，同時に自分自身の子育てを振り返り，どうすればよいか悩み，身近な相談できる場としてスクールカウンセリングを利用するといった事例が小学校では多く見られるのではないだろうか。また，子どもの問題を通じて，自分自身についての相談へも及んでいく傾向が母親面接で見られることから（橋本，1998），小学校での相談は，子どもへの心配に加えて母親自身の問題についても同時に扱っていくことが多くなると思われる。

また小学校は，担任が1日ほぼずっとクラスの子ども達と関わっているため，SCは担任との連携は欠かせないが（田村，2008），担任との連携のあり方についても検討していく必要がある。

本研究では派遣期間の限られている小学校で出会った事例を提示する。この事例は，母親が担任の勧めで来談し，子どもの発達についての話題から，母親自身の子育て，さらには家族関係について振り返り，整理していったものである（全4回）。本事例を通じて，限られた派遣期間における小学校のスクールカウンセリング活動のあり方について，時間制限カウンセリングやブリーフセラピーに基づいて検討することを研究の目的としたい。

以下，母親の発言を「」，Aくんや家族の発言を〔〕SCの発言を<>，教職員の発言を≪≫で示す。

Ⅱ．事例

1．事例の概要

【クライアント】小学校2年生（男）Aくんの母親

【家族構成】父親，母親，Aくん（小2），弟（1），父方祖母，父方祖父の6人

【家族の状況】母親：医療関係の交代制勤務。父親：運輸関係の交代制勤務。祖父母は無職。弟：保育園。

一軒家の1階が祖父母，2階が家族4人の生活スペース

【来談までの経過】

担任からの紹介。7月中旬の保護者懇談会で，母親が子どもの心配な行動を担任へ相談をしたが，途中から涙がこぼれて「私は子どもと関われない」，「子育てができない」と話したため，担任は子育てへの不安が大きいのではと考え，夏休み後にSCと相談してはどうかと母親へ勧めた。

【SCの勤務状況】

4月から週4時間，1学期は10回の勤務。2学期は12回の勤務も決定していた。しかし3学期も派遣が継続するかは未定であった。

【担任からの情報】

Aくんについて，担任は≪これまで気になる子として

意識していなかったです。算数や国語で苦手なところがあるけれど，個別に指導すればできます。集団行動もできていて，対人関係も良好です≫とのことで，≪母親が子育てで悩んでいる様子で。詳細は立ち入って聞いていないが，つらそうでした≫と話した。SCは<母親のつらい部分をまず伺ってみます。カウンセリングの後，今後のことを考えましょう>と伝えた。

2．事例の経過

#1 X年9月末

学校の玄関でインターホンを押していた母親に，偶然通りかかったSCが気づき，ドアを開けて母親へ挨拶をした。この時の母親の表情は硬く，SCは相談室へ案内したが，いったん退室したあと再び来室し，母親へ挨拶をした。母親は「今日は何時まで相談できますか」とたずねたため，50分くらいであることを伝えると，少し安心した表情となった。母親の印象は，明るい感じでカジュアルな服装であった。

主訴を聞く前に，もう少し別の話題で母親との関係を作っていく必要を感じたため，<今日はお忙しい中，お越しいただいたのではないのでしょうか。お仕事などされていらっしゃるんですか？>と質問をした。すると，母親は正規職員として病院勤務をしていること，今日は仕事が休みだったので来ることができたこと，勤務体制について簡単に説明をした。その流れで家族構成について質問をしたところ，父親も交代制勤務であること，子どもが2人，父方の祖父母と同居していることなどを話した。そしてAくんは1歳までは母親が育休をとり，2歳までは祖母が面倒を見た後，保育所で生活していたと加えた。一通り話した母親は「私がこんな風に仕事ばかりしているから悪いのかな，でも仕事は好きでやっているから，やめられないし」とぼつりと語り<大変なお仕事だけど，やりがいもあると感じますよ>と投げかけると，うなずき，しばらくしてから「仕事は好きだし，楽しいです。仕事で子どもと関わってもかわいいと思う。でも自分の子どもがかわいいとは思えない，はっきりいってかわいくないんです。どうして？と思う」と目に涙をためて，ハンカチを出した。<そう思うお母さんのお気持ち，親としてとてもつらいと思います。そう思う理由は，どんなことですか？>とたずねると，Aくんの心配な点をいくつも挙げた。

勉強の心配としては，母親が「連絡帳に書いてある宿題で例えば，調べてくるものなどは，どうやってすると先生が言ってた？」とたずねると「わからん」「しらん」と答えるという。国語の漢字の覚えがわるく，文の理解もできない，算数の文章題も理解できていない，両親が居ないときには祖父母が宿題を見ているが，祖父母も「Aは言っても分らない」と言っていること。生活では時間が守れない，夕方5時，夜9時になったら何をする時間かわからない，下の子へもやさしくできない，などを一

気に述べた。「これに対して私は、上手に言ってやれない。いつもAに罵声を浴びせてばかりで。どうしてできないの？と責めるばかり。ほめることもしないから、怒ってけなしてばかりで。どうしてあげたらいいのかわからない」<どうしたらいいのかわからないのか、本当はもっとほめたりしてあげたいけど、うまく言えない？>「(うなずき) と言ったらいいのかわからないんです。何についてほめてあげたらいいのかわからないのか」、「私は抱きしめてあげることもできないんです。向こうがくっついてきても、来ないで、って思う。本当はぎゅっと抱きしめてあげたらいいんですけど、できないんです。下の子にはできるけど、Aにはできない」<その理由は？>「自我が出てきた3歳くらいから、子供がかわいいと思えない。「私が悪いのは分っています。なんでこんなにかわいくないんだろうって思う(涙)」。

S Cは自責感でいっぱいな母親の気持ちにどう寄り添うか考えたのち、一緒に涙を流し、目頭を押え<そう思うお母さんが一番つらかったのではないですか？>と伝えた。母親は涙を拭きながら「ふっ」と大きく息を吐いた。<こんな風に思っていることは、これまで誰かに聞いてもらって？>「いえ、言えなかったです。夫も基本は子どもがかわいくないと思っているし、Aがこんなに理解できていないことも気が付いていないと思う。実家の母親に、仕事ばかりに目が向いているのがいけないのかなって言ったら、みんながそれでも子育てしている、と言われた。そうだと思った。祖父母から、この子はわかっていないとか、理解ができていないとか、言葉遣いが悪いとか言われ、その度に私のせいだって思ってきた」<1人で悩んでいらっしたんですね。みんなも頑張っているから自分もって。私からすれば、1歳のお子さんもいらっしたる中、よく正規職員としてやっていらっしたると思います。職場の方、みなさんそうなんですか？>「(少し考えて) いえ、ほとんど小さい子がいる人はパートです。日勤だったりして。夜勤に入っているのは私だけかも。職場の人に、家が大変だ、とはいえないけど。そういえば、他の人はお子さんが大きくても、時々大変だといわれる。そうですね、わたしだけです。でも、仕事もずっとこれでやってきているし、職場の上の人でも大丈夫だと思って思う」<お母さんだけ子どもが小さいのにお仕事にやりがいを感じてやってこられた。でもまだ手のかかる子どものことが心配だし>と投げかけると、母親はうなずいていた。<いろいろとお母さんが悩んでいらっしたることはよくわかりました。また聞かせていただけますか。そして一緒に考えて、少しでも方向性が見つかればと思っています。が、私の勤務は学期ごとで12月中頃までですが、いかがでしょうか>「なんか私の相談ですね」と言いながら母親は勤務のシフト表を出して、次回の面接の日程を決めた。最後に母親が「ちょっとほめてやらないといけないですね」と話したので<無理されないように>と返して、

面接を終えた。

【担任とのコンサルテーション】

S Cは<先生が、母親が子育てに不安を感じていると理解して、S Cとのカウンセリングを勧めた見立ては、当たっていたと思います>と述べると、少し安心したように<泣かれていたので、抱えているものが大きいと感じたので>と述べた。

担任へは<母親自身が“私の相談”としてカウンセリングを継続していくと思います。母親の気持ちの整理を限られた勤務の中でやっていきたいと思っています>とカウンセリングの内容の詳細は伝えなかった。そして<担任の先生や学校でできる支援は今のところ見当たらないので、とりあえず温かくAくんやお母さんを見守っていただきたいのですが>とお願いした。担任はうなずき<わかりました。Aの様子は観察しておきますし、またS Cもどんな感じの子か教室へ見に来てください>と了解し、支援を進めていくことにした。

2 X年10月中頃

母親は、前回よりも表情がやわらかい。すぐ最近の様子について話し始めた。

「ほめるのは難しかったので、やってくれたら助かるわ、っていったら、本人がますます調子にのってやって、私にくっついてくるので、わーっ離れて、と思った」と明るくジェスチャーを交えながら話した。<そうだったんですね。Aくんへの対応を考えられたんですね>「子どもってすぐ調子に乗るって言うか、そのペースについていけなくて」<子どものペースに合わせるのは大変ですよ。けれどもお母さんはお子さんのそういった様子をよく見ていらっしたんですね>と子どもへ目が向いている母親を肯定的に評価した。

S CはさらにAくんへの対応方法について質問をした。母親は深夜に帰宅しても、連絡帳をチェックして持ち物などを確認し、Aくんが準備していない物があれば、整えていて「これは最低でもしないといけないことだと思う」と話した。<疲れて帰っていらっしたるでも毎日きちんとやっていらっしたるんですね>「祖父母は当てにならない。最後までやってくれない。私が毎日見てやれないからダメですけどね。任せるなら任せたらいいのだけど、最後までやってくれないから、任せられなくて」と祖父母への不満を述べた。S Cが<そういう気持ちって、どうしていらっしたるんですか？>とたずねると「時々、言っていますよ。ここのところができていなかったから、もうちょっと見てやって、お願いね、とか」<そしたら？>「わしら、みとるけど、Aがわからんって言うから、とか言っている」<そういわれたら？>「Aが、ちゃんと理解して帰ってこないのがどうしてなのかと心配になる。これをどうにかしないとけない」と母親は考えていた。

母親や父親の勤務状況についても質問をした。母親は3交代の勤務だが、緊急時の対応もあって時間通りに帰宅できないこともあるようだ。父親は深夜の勤務が多く、夕方家を出て、次の日の夕方帰宅し、日曜日は休みであるという。父親が夕方家にいるときには、子ども達を風呂に入れてくれるが、疲れていることもあって、宿題や学校の準備はしない。母親と父親が家にいない時は、祖父母が子ども2人を見ることがになっており、保育園の迎え、ご飯、お風呂、宿題、寝かしつけまでしているという。夜寝るのは、母親と6割、祖母と4割くらい。祖父母は子どもに関しても、家事の掃除や皿洗いなども大雑把なため、母親は帰宅してから必ず家の片づけもしている、と述べた。「私が毎日一緒にお風呂、宿題、毎日一緒に居てやれていないから、こんな風に宿題も学校の準備も家のことも、いい加減。こんな状態が続くのはいけないと思う」<毎日居てやれないからって思うんですか？>「そうです。だからせめて帰ってから宿題はできないにしても、持ち物のチェックだけはしている。それしかできなくて。でも、どうにかしないと、と思って。それで、この間に実は夫とも、職場とも話をしたんです」<そうなんですか！それで？>と話を進めた。

母親は、父親が日曜日は休みなので、母親も土日は働かないようにして、日曜日に家族で出かけたいことを父親へ勇気を出して相談したところ、父親は「急にどうしたの？」と驚き、母親が「子どものことが気になっているから」と伝えると「そうか」との返事だったようだ。職場にも思い切って勤務の変更をお願いしたら、上司は小さい子供がいて大変だろうと、土日の休みを了解してくれたようだ。「結構わかってくださって、でも言うのにとっても勇気がいった。これで断られたら、パートか退職かと考えていたけど、とりあえずAや下の子と触れ合い、宿題や勉強をみてやる時間を週末に持ってみたいと思う」と述べた。SCは子どものことを考えて決めたこと、そして勇気を出して相談できたことについて評価した。

その後、母親が帰り道に見かけたAくんと友達とのやり取りについて話題にし、Aくんの友達への話し方が母親に似てきつい言い方であったことから、母親自身反省し、直すように心がけていきたいと語った。そして「Aに対しては、どうしてそんな風にするの、と追求し責めて終わりです。そういってもAは直っていないから、どう言ったらいいのかわからなくて」と具体的な対応について悩んでいた。<難しいですよ。例えば、こうしてみたら、って具体的にお母さんが良い例をやってみるのはどうでしょう。例えば、ごめんね、とこんな風におじきをして言うとか>と伝えると、母親は「そうか、そうですね。じゃああの時も、悪いこととしてごめんね、こう言えばよかったですね」<そうそう、それならわかりやすいと思います>「早速やってみます」とすっきりとした表情で次の予約を決めた。

【Aの授業参観と担任とのコンサルテーション】

SCはこの間、Aくんの様子を教室で観察した。授業中は、担任の指示に従って活動をしていた。まわりの子と上手に関わっていると感じた。

担任からは、様子は特に変わらないとのことだった。SCからは「母親がAくんと時間を持つように意識し始めています」と伝えた。そして、変わらず見守っている担任へ「いつも見守っていただいております」とお礼をすると、「それくらいしかできませんから」と返した。

3 X年10月末

母親は、土日が休みになり、月曜日から金曜日は日勤と夜勤で慌しくなって、子どもと関わる時間は減ったようだ。しかし、週末に家族4人で外出したことや、勉強を一緒にしたことで「接する時間が持てたことで、少し満足した」と感想を述べた。

この間、学校の参観日があった。「Aだけ遅れていると思いきや、Aの今のペースでいいのかなと思った」<Aくんが授業に取り組んでいる姿を見ることができて、よかったですね>「ホッとしました」。そして「できるようになったことにも目が向くようになったんです」と、時間割、体操服などの準備物、やるべき宿題などができるようになってきたと、うれしそうだった。<このようにできるようになったのは、お母さんが関わって取り組んでいらっしゃるからでしょうか？>と伝えると、「そうだといいんですけど」とほほえんだ。

しかし、宿題に関しては、週に2回くらい祖父母がさせてくれないこと、宿題で間違えているところは直させてほしいのにそのままになっているため、祖父母に対してイライラしていると話した。祖父母へ「確認してほしい」と言ったら「やらせるだけで大変」との返事。「それなら私がどうにかしなければいけないですよ」と、Aくんが帰宅してから夜勤へ出かけるまでの30分から1時間の間に、宿題を見るようにしているとのこと。「でも、週のほとんどは祖父母にお願いしているので、どうしたらいいのか。私の対応にも限界があるし。祖父母が精一杯といっているのに、これ以上何も言えないし」<難しい問題ですね。なかなかお母さんの思うようにいかないですね>と伝えると「本当に。思うようにいきません」<また一緒に考えていきましょう>とSCは伝えつつ、次のカウンセリングの予約を母親と確認したところ、母親は土日の休みが増えたことで、SCの勤務日の平日の休みが減っていた。そして、1か月後にカウンセリングを決めた母親へ「3学期の勤務次第ですが、次回が最後になるかもしれませんね」と伝えると「ああ、そうですね。わかりました」と自分のシフトとカウンセリングの予定を確認した。

SCは最後に「今日話したいことは他にはなかったでしょうか？他になにか話しておきたいことはありましたか？」と尋ねた。

か?>と質問をしたところ「特にはないです。だいたい話したと思います」とのこと。加えて「ここで話したいことは、話せていますか?>とたずねると「はい、聞いてもらえて、気持ちが落ち着いてきているのと、整理できてきている感じです」と答えた。

【担任とのコンサルテーション】

担任は、Aくんの様子について「変わらず元気になっています。特に気になることはなく、友達と楽しそうにしています」と報告した。「カウンセリングは次回が最後になるかもしれないけれども、母親がAくんと関わろうとする気持ちを尊重しながら対応しています」と伝えると、担任はこれまで同様に見守っていく姿勢を示した。

4 X年 11 月末

SCの派遣期間も2学期までと決まり、今日でカウンセリングが最後になることを確認すると、母親は「そうなんですね。残念ですが。この間いろいろとあって、それを今日は聞いてもらわない」と話し始めた。

まず、母親なりに考えて担任へ宿題についてのお願いの手紙を出したと報告した。その内容は、調べてくる宿題はAくんが何に書けばよいかわからないので、口頭だけの説明ではなく、連絡帳に何に書いてくるかを書かせてほしいというものだった。同時に母親からもAくんへ何に書いてくるかを忘れずに書いて帰るように毎日伝えはじめていた。

その後、「それと同じ時期に、実は家族会議をしたんです。もう大変でした」と話し出した。母親とAくんは習い事の時間までに宿題をしておくことを約束しているが、ある日、母親が夜勤明けで戻ってきた時、習い事があるのにAくんは宿題をしていなかったとのこと。母親は「宿題をしないと、習い事には行くことはできない」と叱り、「一緒に宿題をしよう」と誘ったが、それでもやらないAくんに対して、ますます大きな声で叱ったという。その母親の叱る声を聞いていた祖父母が「別に行かせてもいいんじゃないか」と口を挟んだため、母親は「いけません、宿題が優先です」と言ったら、祖父母はこれまで我慢していたことが噴き出したかのように、母親に対しての不満を述べたようだ。「そんな言い方じゃあ、子供が宿題をしない。もっとやさしくいえないのか。私たちにもきつい言い方しかできないし、とか、うちらにも宿題を責任持ってほしいって言うなら、自分が仕事を4時に終わって帰って見てやったらいい、夕方家にいて見てやってほしい、母親しかできない、といわれて。私はそんな風にならずと思われてきていたんだと思ったら、自分がいけなかったのかなって思った」と母親は涙を見せず、SCの顔を見てしっかりと話した。そして「これはもう限界だ、と思って、次の日実家に行って母親に話を聞いてもらったら、あんたが不器用すぎるからできないのだと。不器用かもしれないけど、結局実家で

も私が責められて、どうしていいかわからなくて。でもやっぱりもうこれは仕事をやめるしかないと思った。だから職場の上司へ、家がこんな状況だからこのままで仕事を続けることはできないと相談して。できればパートで働きたいと言った。上司には、もしパートなら代わりの人を探さないといけないから、それまでは今のままで、と言われた。しかし、辞める覚悟もできていることも伝えました」と涙を見せずに語る母親に対して「大きな決断だったと思いますが、お母さんの気持ちは大丈夫ですか?>ととても心配そうにたずねた。すると母親は「仕方がないです。言ってすっきりしました。いろいろあったけど、やっぱり自分が変わらないと思って思ったから大丈夫です」ときっぱりと答えた。SCは再度「本当に短い期間にいろいろなことを決めたり、変えていったり、大変でしたね」と伝え、母親は「こうやって聞いてもらえて、自分が何をしないといけないのかって分かってきました。祖父母と言い合いになった時はつらかったけど、知った以上はこうするしか選択肢がないと思ったから。いずれこうなってしまう」と自分が決めた現状を受け入れている様子であった。最後に「今まで子どもに対してやってこなかったことをしていきたいと思います」と述べて、面接を終えた。

【担任とのコンサルテーション】

担任へは# 4の面接で母親が決めた方向性について簡単に伝えると「母親自身が悩んでいたことが、ちょうどよいタイミングで話せる場があってよかった」とコメントをした。

この先、母親とAくんに対して、担任ができる支援とともに考えた。母親がAくんの心配として一番に考えていることは、担任への手紙に書いてあったように、調べ物の宿題を何にどのようにすればよいかであることを共有した。担任はAくんに連絡帳に書いて帰るように声をかけて、連絡帳に書いたか確認するようにするとのこと。SCはその考えに大いに賛成し、お願いをした。加えて、母親と出会う時に担任からさりげなく声をかけて欲しいとお願いすると、担任は快く了解した。

Ⅲ. 考察

事例から、①母親面接で留意する点について、②学校組織の一員としてSCが留意する点について、時間制限カウンセリングとブリーフセラピーの視点を踏まえて、考察を進めていきたい。

1. 母親面接で留意する点

1) SCの派遣期間と1回のカウンセリング時間の明確化
時間制限カウンセリングでは、クライアントとカウンセリングの目標設定をし、面接回数や1回の時間を決定しているが、目標を達成するために、カウンセリングに

においてはカウンセラーとクライアントの積極的な相互の関与とカウンセリング内容の活性化が求められるという(上地, 1999)。これは母親面接においても同様であり、カウンセラーとクライアントの相互のやりとりが活性化することで、限られた回数でも効果的な支援が可能であることを野田ら(1999)が明らかにしている。

本事例では、学校からSCの勤務の案内が配布されていたこともあり、母親はSCの派遣期間と勤務回数を理解していた。また#1のはじめ、母親が1回の面接時間についての質問をしたため、SCが50分であることを伝え、ほっとした表情となった。時間制限カウンセリングのようにクライアントと話し合って面接時間を決めただけではなく、SCから面接時間を提示したが、結果として母親にとって納得できた時間であったのではないかと考えられる。カウンセリングの目標については、子どもへの対応というより、母親自身の気持ちの整理をしていくこととなったが(#1)、面接回数については、初回面接に決定して進めていくことはできなかった。その理由は、母親の勤務予定が見通せなかったためであった。したがって、各回に次回の日時を決定し、同時にSCの勤務予定を確認していった。#3では派遣期間が2学期までならば、次が最後となることも伝え、#4のはじめには正式に今日で最後となることを母親と確認した。このように面接回数は#1に決定できなかったとしても、面接時間と回数、SCの派遣期間という現実的な枠組みを母親と毎回共有したことで、「今日はこれを聞いてもらわないと(#4)」と、母親が話したい内容や順番を考えながら積極的にカウンセリングで語ることができたのではないかと考えられる。

2) 関係性の構築と技法

#1の最初の母親の緊張した表情から、母親が思い切ってカウンセリングに訪れたと感じられた。しばらくその緊張をほぐすための会話を進めていくと「私がこんな風に仕事ばかりしているのが悪いのかな」とぼつりと語った。SCはこの発言から、母親が仕事と子育てに悩んでいるかもしれないと見立てた。その後、少し詳しい状況を聞いていくと「Aにできていないことがあるのは、自分が悪いからだ。だから自分がどうにかするしかない。けれども子どもに関わる時間はない」と仕事と子育ての両立の難しさの中で母親は混乱し、その後「Aがかわいいとは思えない」と考えるに至り、涙を流したのではないかと感じた。SCも母親がこれまで溜め込んできた気持ちに合わせ、ともに涙を流したが、こうすることで母親の自責感を軽減するとともに、どうしてよいのかわからない混乱した気持ちをゆるませ、安心してカウンセリングで語れるようになるかもしれないと考えた。

ブリーフセラピーでは、初回面接においてクライアントの非言語を含めた気持ちに能動的に合わせ、関係を構築していくことを重要視している。特に学

校現場は何回面接が継続するか見通せないため、いかに初回面接で相手に合わせられるかで、その後のブリーフセラピーの技法が有効になるかが決まってくる(黒沢, 1999; 村田2003)。

本事例でも、母親の涙に合わせた後、いくつかの技法を用いながら、問題解決へ向けて支援をおこなった。まず、<1人で悩んでいらっしたんですね。みんなも頑張っているから自分もって。私からすれば、1歳のお子さんもいらっした中、よく正規職員としてやっていらっしたと思います>とエンパワメントした。そして母親の「みんなが頑張っているから、自分も頑張るのは当然」という認識の変換をはかるために、職場の人と母親との状況が一致しているかどうかをたずねた。すると母親は自分のように小さい子どもがいて正規職員で働いているのは自分だけであることに気がつき、自分の頑張りへと目を向けた。その仕事への頑張りについて、<やりがいを感じている母親>としてリフレーミングし、仕事ばかりして子どもに目が向いていないのではなく、やりがいのある仕事を頑張っているという見方を母親へ伝えた。#2以降では、母親が家族関係や仕事と自分、そして子どもと自分の関係についてひとつひとつ解決していく過程を見守りながら、さらに母親をエンパワメントしていった。#3の最後には、<母親がカウンセリングで話したいことは他にないか、話したい内容を話せているか>と質問した。これは母親がカウンセリングに積極的に関わっていくことを促すとともに、「母親の気持ちの整理」というカウンセリング目標に向けてどのくらい達成できているかを確認するためでもあった(栗原, 2001)。

このように関係性を構築し、適切な介入として技法を導入していくことで、母親の面接に対するモチベーションは高くなり、面接の効果や効率が増したのではないだろうか(宮田, 1999)。それが本事例のような4回という面接回数での支援へつながったのではないかと考えられる。

3) クライアントの成長力を信頼すること

本事例で反省すべき点として、カウンセリングの回数が限られているといった枠組みにSCが捕らわれすぎていたことである。そのため、より正しい介入や効果的な援助を考えすぎるあまり、時間制限カウンセリングやブリーフセラピーの特徴でもある“クライアントの自己成長力を信頼し支援する”という姿勢に欠けていた。

例えば#4で、母親が「仕事を正規職員からパートまたは辞めると決めた」と語ったが、この決定を聞いてSCは大きく動揺した。その理由は、「母親の相談」としてカウンセリングを進めていったため、母親へ「自分がどうにかしなければ」という気持ちを強めてしまったのではないかと感じたからである。母親はこれまで悩んでいたことを決めることができ、スッキリとした表情をしていたが、SCは母親が無理をしているのではないかと

感じ、SCの心配している気持ちを母親へ伝えてしまった。後で振り返ると、仮に母親がいったん仕事から離れてしまっても、医療の専門職という立場で再び働くことができる可能性が高いため、母親の決断を応援する言葉を伝えるべきであった。さらに、短い期間で真剣に自分と向き合い、多くの問題を整理していった母親を評価すべきであった。

また限られた派遣期間では、SCはその後のフォローができないため、時間制限カウンセリングでおこなっている予後面接や、その後のクライアントの様子を知ることができない。よって、万が一何かあった場合に、どうしたらよいか、どうしていきたくかについて母親へ投げかけ、ともに考えておくべきであったことも反省点である。

2. 学校組織の一員としてのSCが留意する点

小学校は担任が子どもや保護者の様子を一番よく知っている存在であるため、担任との連携は欠かせないことは先にも述べた。ただ、本事例のように、担任および学校では問題として特に意識されていない子どもでもあり、保護者の相談としてカウンセリングを利用している場合、担任とどのように連携し、母親支援を進めていくか、検討する必要がある。

本事例は、担任からの紹介で母親とのカウンセリングがスタートした。担任は「子育ての不安が大きいのでは」と見立てており、担任の立場で母親と関わることは難しいだろうと判断していた。この担任の見立て通り母親は母親自身のことを相談した。したがって、#1後の担任とのコンサルテーションにおいて、SCは担任が求める内容や必要な情報以上を提供せず、担任の立場として日々関わっているAくんにできそうなことをともに考えていった(金丸, 1999)このように、SCと担任の役割分担をしながら事例に取り組んでいったことが、結果として短期間で効果的な母親支援へつながったのではないかと考えられる。

本事例ではスムーズにSCと担任の役割が明確化されたが、反対に、担任や学校が母親面接の内容について、学校における相談という責任上、知っておきたいと希望する場合も考えられる。したがって、学校ごとに情報の共有の仕方や期待されるSCの動きを把握しておくことが必要であり、それに応じた情報提供の仕方を工夫すべきであろう。さらにその流れが母親への支援全体にどう影響するかについて見通しておくべきだと考えられる。

IV. 結論

本論は、小学校のSCとして派遣期間が限られた中で、どのような活動ができるのかについて、ある母親面接を時間制限カウンセリングとブリーフセラピーの視点から

検討した。その結果、留意する点として、以下の3点が挙げられた。①SCの派遣期間と1回のカウンセリング時間を明確にしておくこと、②関係性の構築の仕方と技法をどのように使っていくか、③クライアントの成長力を信頼することであった。また、学校組織の一員としてSCが留意する点として、本事例のような母親自身の相談の場合、担任や学校との連携のあり方も検討する必要があった。

今後SCの勤務形態は多岐に渡ると予想される。本論はあくまでも一事例からの検討であるが、今後多くの事例を通じてSCの活動のあり方が検討されることが望まれる。また、小学校に限らず、中学校、高校においても、限られた派遣期間の中でのSCの活動についての研究が展開されることを期待したい。

謝辞：

本論文の事例は、富山県臨床心理士会学校臨床心理士研修会で発表したものを加筆・修正したものです。研究会にご参加いただいた先生方から多くの学びをいただきました。感謝を申し上げます。

文献

- 橋本やよい (1998)：母親面接の Narrative について 心理臨床学研究, 15 (6), 623-634.
- 伊藤美奈子(2008)：学校で役に立つスクールカウンセラーとは 児童心理, No.876 (スクールカウンセラー 小・中学校での役割と実践), 2-11.
- 金丸慣美 (1999)：コンサルテーション 吉川悟 (編) システム論からみた学校臨床 金剛出版 47-57.
- 栗原慎二 (2001)：ブリーフセラピーを生かした学校カウンセリングの実際 短期学校カウンセリング5段階の提案 ほんの森出版
- 黒沢幸子 (1999)：子どもや親との関係作り 宮田敬一 (編) 学校におけるブリーフセラピー 金剛出版 55-69.
- 宮田敬一 (1999)：ブリーフセラピーの学校での適応 宮田敬一 (編) 学校におけるブリーフセラピー 金剛出版 9-23.
- 村田武司 (2003)：学校現場における独断的ブリーフセラピーの実際 ブリーフサイコセラピー研究, 12, 51-55.
- 野田暢子・上地安昭 (1999)：いじめ・不登校生徒の母親の時間制限カウンセリング—怒りを静めた母親が再生に向かった事例— カウンセリング研究, 32, 311-319.
- 岡本淳子 (2008)：小学校におけるスクールカウンセラー 児童心理, No.876 (スクールカウンセラー 小・中学校での役割と実践), 21-27.

阪幸江 (1999) : 小学校低学年での事例 吉川悟 (編)
システム論からみた学校臨床 金剛出版 114-126.
田村節子 (2008) : 連携の考え方・進め方のコツ 児童
心理, N o.876 (スクールカウンセラー 小・中学校
での役割と実践), 76-84.
上地安昭 (2001) : 時間制限カウンセリングの実践モデ

ル 上地安昭 (編) 学校の時間制限カウンセリング
ナカニシヤ出版 73-86.

(2010年8月31日受付)

(2010年10月6日受理)